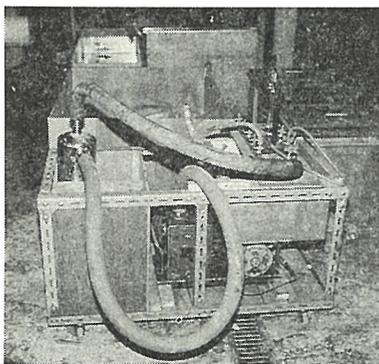


旧新島襄墓碑の修復と保存

— 樹脂含浸による墓石の強化 —

鈴木 重治

破損した校祖の墓碑については、その修復と保存に向けての同志社大学考古学研究室と、校地学術調査委員会による協議を受け、基礎的な作業を実施したことを本誌の前身に報告した。ここでは、その後の作業の進



墓碑への樹脂含浸

行状況と、その内容について概要を記して置く。

まず、墓石自体の物質としての劣化が進行していたことから、保存・修理にあたって、その強化をはかることを前提として、文化財の保存に実績のある樹脂の選定が問題となった。結論的に指摘すれば、国宝の高松塚の古墳壁画や、六波羅密寺に保存されている重要民俗資料の泥塔などの保存修理に使用された樹脂を使用することとした。

一方、同志社人の精神的な支柱としての校祖の墓碑は、その形態上の特徴を含めて関係者の脳裡に焼き付いていることから、風雪に堪え抜いてきた結果としての墓碑の色調にも、大きな変化を生み出さない樹脂であることも一つの条件と考えられた。つまり、復

元・修理後の仕上りが、破損される以前の状態に近いエレガントなものであることが要請されたことになる。このことを受けて選定された樹脂が、米国の ROHM & HAAS 社製のアクリル系熱可塑性樹脂であり、協力して作業を進めている元興寺文化財研究所による実験の成果も尊重してのことであった。つまり、PARALOID である。

樹脂の減圧含浸に当っては、写真に示した機器によって真空状態を保つため 68 mm H₂O



樹脂含浸後の表面の手入れ作業

で3時間空気を抜き、その後、12・5%の濃度の樹脂を4時間注入して放置し、一分間60m³の空気の流れのある部屋で6日間にわたって樹脂の臭いを抜き取った上で乾燥させるという作業に入ったわけである。これらの作業は、一貫して元興寺文化財研究所でおこなわれており、現在、大きささまの破片を含めて樹脂含浸後の乾燥を続けている段階であり、十分に乾燥したかどうかを確認した上で、復元の為の組み立て作業に入ることになる。

保存を前提とした組み立て作業に当っては、部分的なレプリカの作成を含めて、強度を高めるためのシャフト挿入の方法についても、慎重に検討された上で実施されることになる。いずれにしろ、歴史的な遺産としても評価される校祖新島襄の墓碑だけに、修復過程のそれぞれの時点で、最善の方法が求められるのは当然のことであろう。

(同志社大学校地学術調査委員会 調査主任)

新島襄先生墓碑再建除幕式

昨年六月、一寮生のたわむれで、倒壊した新島先生の墓碑がこのたび再建され一月十六日(金)午前十一時より若王子山頂同志社墓所で、理事、監事、校長会メンバー他学校関係者と新島家からは、社友新島得夫氏、新島公一氏父子が出席され、約六十名の参加のもと除幕式が執り行われました。

再建された墓碑の原石は、米国バーモント州ラットランド産のグラニット(花崗岩)で、墓碑は高さ一三五cm、幅七十五cm、厚さ三十cmで以前より若干大きくなっており、墓碑銘は、旧墓碑銘と同じ勝海舟の筆で、墓碑の裏側の左に松山総長の筆で再建文「一九八七(昭和六十

二)年一月再建 学校法人同志社」と刻まれている。

なお、制作は、株式会社澤吉である。

新島襄先生墓碑再建除幕式次第

1987年1月16日(金) 11時
 於 若王子山頂同志社墓所

司会	庶務部長	園部	望同
讚美歌	15 (1,2,4,5)	会衆	一彰
聖書朗読	ならびに祈禱	理事	遠藤
合唱	寒梅詩	総長	松山
式辞		理事長	松山
除幕		大学長	原会
挨拶			衆田
頌祝	540	大学宗教部長	深田
祝			生